

佳作

語り部の方の思い

広島県 広島学院中学校二年 津田 一真

普通、感動とは、素晴らしいものに触れたり見たりして、心が動かされることを言いますが、僕にはそれとは少し違う心を強く動かされた出来事があります。

僕が通った幼稚園の園長先生が語り部としてお話されると聞き、八月六日、平和記念公園に行きました。七十四年前の同じ日、突然閃光が散り、広島の人々に熱線と放射線と爆風が襲いかかりました。空に黒いキノコ雲がモクモクと広がり、不気味な静寂が辺りを包み込みました。西条へ向かう途中の電車で、前にいた上半身裸の男性の体が真っ黒で、泣きながら生のジャガイモをかじっていたことが今でも脳裏に焼き付いているそうです。

園長先生は、いつも穏やかでにこやかで、周囲の人を温かく包み込んでくれる方です。戦争のイメー

ジなど全く感じさせない園長先生の口からそんな暗く悲しい体験が語られたことは、僕にとってもとてもショックなことでした。僕の通った幼稚園は、平和教育に力を入れていて、僕は当時『かわいそうなぞう』という本を先生が読んで聞かせてくれたのをよく覚えています。

実は、園長先生はそうした教育方針をとる一方で、語り部として八十二歳になる今日まで、自身の被爆体験を人前で語ることは一切ありませんでした。園長先生は、自身はあまり悲惨な体験をしていないという思いがあったと話の中で強調されていました。きっと、自分よりもはるかに悲惨な体験をされた方が大勢いるのに、自分が被爆体験を語るのをおこがましいのではと感じていたのでしょう。

しかし、園長先生の孫が幼稚園児だった頃、「おばあちゃん、キノコ雲見たの？私も見たかったなあ。」

と無邪気に言った時、知らないとはこういうことなのかとショックを受け、『キノコ雲を見た者の責任』として次世代に話していかなくてはと決意されたそうです。

ある人は十二歳の時、腹痛で建物疎開作業を休ん

だが、級友全員を原爆に奪われました。九死に一生を得た喜びより、大切な人を亡くし生き残ってしまった自分を責め続けたそうです。それから三十年以上たって証言活動をするのが、『後ろめたさを克服する一つの道』と気づき、語り始めたそうです。

原爆によって心に負った傷に大小はありません。被爆者の方々は苦しい思いを乗り越えて、僕たちに語ろうとして下さっています。その思いに目を向けた時、僕は心を強く動かされました。

被爆体験をされた方々が高齢になられた今、僕たち学生は直接話を聞くことの出来る最後の世代かもしれません。体験談として耳を傾けるだけでなく、僕たちに話すたびに「悲しいあの日の出来事を思い出さなければならぬ」ということと、それでも僕たちに話して下さるその意味、心の後ろにある苦しい思いもしっかり受け止めたいと思います。そして被爆者の方々から聞いたことを次の世代へつないでいけたらいいと思います。